（続紙　１）

京都大学	博士（　教育学　）	氏名	荻原 祐二
論文題目	日本社会・文化の個人主義化に伴う不適応問題の解明		

（論文内容の要旨）

本論文は，日本社会・文化がどのように個人主義化しているのか，さらに個人主義化が不適応を生み出しているプロセスについて，実証的に解明した文化心理学研究である。論文は，5章，5つの研究から構成されている。

第1章「文化の変容とその心理的帰結に関する研究」では，導入として，文化の変容とそれに伴う心理的帰結に関する先行研究について概観している。文化心理学研究を展望しつつ文化の動的な側面はほとんど検討されてこなかったとしている。そして，文化の変容の問題として，文化の個人主義化を定義し，アーカイブデータと文化的産物をもった研究手法について述べ，制度と人間の心理の 2つの側面から日本社会・文化の個人主義化の進行とそれが日本人の心理に与える影響について概観している。

第2章「日本文化の個人主義化」では，文化的産物である子どもの名前を用いて研究 1 では，ベネッセコーポレーションと明治安田生命による 2004 年から 2013 年までの子どもの名前ランキングを分析している。その結果，一般的な漢字が与えられる割合は増加しているが，一般的な読みを与えられる割合は減少していた。子どもに個性的な読みの名前を与える親が増加していることから，日本文化は個人主義化していることが示されたとしている。

第3章「日本文化の個人主義化と幸福感の変遷」では，日本文化の個人主義化 が人々の幸福感と関連を検討している。研究 2 では，1964 年から 2011 年までのアーカイブデータを用いて個人主義指標として単独世帯の割合，世帯サイズ，離婚率を用い，幸福感指標として，生活満足度を用いて二次分析を行った。一人当たり GDP の値を統制したところ，個人主義傾向が高い年ほど幸福感が低いことが明らかとなった。よって，日本文化の個人主義化は 少なくとも現在のところ，人々にネガティブな影響を与えている可能性が示されたとしている。

第4章「日本文化における個人主義と幸福感の関連」では，日本文化の個人主義化が日本人の幸福感の低さとなぜ関連しているのかを検討している。研究3では，日本とアメリカの大学生計183名を対象に質問紙調査を行い，日本において個人達成志向性が高い人は親しい友人の数が 少ないために幸福感が低くなる一方，アメリカに おいてはその関係が見られなかったとしている。研究4では，京都大学生61名を対象に2波の縦断調査を行い，個人達成志向性は，2ヶ月後の親しい対人関係の数を減少させ，幸福感を低下させていることを見いだしている。研究 5 では日本人が個人主義という概念をどのように捉えているかを市民997名のウェブ調査を行い，個人主義は，独立と自由をもたらすポジティブな面と，関係性の希薄化を招くネガティブな面の両面で捉えていることを明らかにしている。

第5章「総合考察」では，一連の研究で得られた知見に対して総合的な考察を行った上で，欧米，日本の過去と現在の個人主義に関わる文化と心理の相互過程と不適応を生み出すモデルを提起し，本論文の理論的・実践的意義について述べている。そして，本論文の 限界点を整理し，今後の展望について概観している。

（続紙 ２ ）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は，日本社会・文化の個人主義化と，個人主義化が不適応を生み出すプロセスについて，調査と実験，アーカイブデータ，文化的産物，その心理プロセスを解明する 5 つの研究を行った。そして，これまで未解明であった文化の変容プロセスの一部を明らかにしている。

本論文の特色は以下の 3 点である。

1. 文化の変容プロセスに着目して，他分野も含む先行研究の知見と多様な実証データを踏まえて，日本社会・文化の個人主義化と不適応を生み出すプロセスについて解明することによって，文化心理学の研究領域に理論的インパクトをもつ点
2. 質問紙法による心理指標によって個人差を測定する方法と，アーカイブデータの 2 次分析によって時系列的変化を測定する方法，文化的産物にも着目した方法によって，多角的にデータ収集と時系列分析をおこなった点で，方法論上の新しさを持つ点
3. 個人主義化にともなう関係の希薄化，さらに，メンタルヘルスの悪化や，引きこもり，自殺率の増加などに対して，実証データに基づいて問題解決への示唆をもつ点

第 1 章では，文化心理学研究を展望しつつ，文化の変容の問題として，文化の個人主義化を定義している。ここで，文化心理学の先行研究では，一時点での文化による差異は示してきたが，文化の動的側面が扱われてこなかった問題点を主張したところに本研究の着眼点の鋭さがある。

第 2 章では，日本文化が個人主義化しているかを，文化的産物である子どもの名前のデータを用いて，個性的な読みが増えていることから，個人主義化を示しているとしている。結論がやや性急ではあるが，名前に用いる漢字の多様性ではなく，読みの多様性の増加を見いだした点は，本研究による新たな発見である。

第 3 章では，日本文化の個人主義化の指標としての単独世帯の割合，世帯サイズ，離婚率の上昇が，一人当たりの GDP を統制すると，生活満足度の低下と関連していることを明らかにしている。こうした人口学的指標と経済成長，生活満足度の関係を明らかにしたことは，心理学だけでなく，人口学など関連分野においても意義をもつ。

第 4 章では，日米の大学生に質問紙調査を行い，日本では個人達成志向性が高い人は親しい友人の数が少ないために幸福感が低くなる一方，アメリカではその関係はないこと、京都大学生の縦断調査では、個人達成志向性は 2 ヶ月後の親しい対人関係の数を減少させ，幸福感を低下させていること、日本の市民対象調査によって、個人主義がポジティブとネガティブの両価的なものとしてとらえられていることなど、新たな多くの事実を見いだしている。これらは、文化心理学における重要な成果である。

第 5 章では，本研究の知見を踏まえて提起したモデルは，西欧と日本の過去・現在の個人主義に関わる文化と心理の相互過程と不適応を生み出すプロセスを説明しており，文化心理学における価値ある理論的貢献である。さらに，このモデルによる対人関係の希薄化による社会問題の予防・解決への示唆は，この研究の

応用面での貢献の可能性を示すものである。

以上のように本論文は，日本社会・文化の個人主義化に伴う不適応過程を解明するために，文化心理学をはじめとする幅広い研究を踏まえた問題意識に基づき，アーカイブデータ，文化的産物，大規模調査を積み重ねて，考察を深め，統合的モデルを提起することによって，学術面と応用面で多くの新たな成果をあげているが，今後に残された問題として以下の点が指摘できる。

(a)個人主義，幸福感と生活満足度のより厳密な定義と測定指標の検討，個人主義化の指標（名前読み多様性，離婚率など）に関する他要因も含む議論展開，関係性（社会関係資本など）や伝統的価値観との葛藤に関する指標の必要性，個人主義と集団主義が両立する可能性の検討

(b)個人主義化から不適応行動にいたるプロセスの精緻化，GDP が個人主義を媒介して生活満足度に及ぼすプロセスの解明，関係性の希薄化に影響する要因の広範な検討，世代間の分析の必要性

(c)個人主義化に関わる広範な長い時間スパンのデータ（他国のアーカイブ，World Value Survey，JGSS，日本人国民性調査など）を用いた文化変容の検討の必要性

(d)人がなぜ個人主義化に向かうのかの考察，個人レベルに加えて集団レベルでの介入の検討

しかし，こうした点は，本論文で見出された多くの新しい知見の価値を損なうものではない。

よって本研究は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また，平成 27 年 2 月 9 日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は，本学学術情報リポジトリに掲載し，公表とする。特許申請，雑誌掲載等の関係により，学位授与後即日公表することに支障がある場合は，以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降